Blossom's Blue

RAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｂｌｏｓｓｏｍ's Ｂｌｕｅ

【Ｎコード】
Ｎ８５３３Ｖ

【作者名】
ＲＡＮ

【あらすじ】
私が好きになった人は、親友の好きな人でもあった。
親友のために身をひいた京子を、密かに想う耕助。
傷ついた京子を、耕助はだんだんと癒していき、二人は近づいていく。

※ｄノベ転載　「惑う星達」瞭と理紗の両親達の学生時代、そして今を描く番外編

（前書き）

「惑う星達」両親たちの番外編。

私が好きになった人は、親友の好きな人でもあった。

「え？」

京子は、今聞いた言葉がうまく理解できず、目を見開いて聞き返していた。

京子の目の前にいた清美は、はにかんだ笑顔で、もう一度小さな声で言った。

「健司と、付き合うことになったの」

京子は、少し間を置いて、その言葉を飲み込もうとしていた。

言葉の意味はわかっている。

だが、どうも頭が理解することを拒否していた。

何より、清美が、彼を「健司」と呼んでいることも、受け入れることができなかった。

清美と京子はサッカー部のマネージャーだった。

そして、健司もサッカー部に所属していた。

それは互いに、健司がいるからでもあったのだが。

「そ、そう。おめでとう。よかったね。清美、野崎とよく話してたしね。野崎も、まんざらでもなかったように見えたもの」

京子は、何とかそう言った。

だが、自分では、とても空虚な言葉だと感じていた。

清美は、気づかずに笑っていたが。

「長野」

その日は清美と一緒に帰る気にもなれず、わざと学校に残っていたら、声をかけられた。

「白河」
同じサッカー部に所属し、健司の友人である白河耕助だった。
どちらかというと、健司より耕助の方が見た目もよく、優しい性格だったので、人気があった。
人好きする性格だったので、男女どちらにも悪い印象を与えなかった。
だが、京子は今、耕助にもできれば会いたくなかった。
「健司、今田と付き合うことになったんだってね」
京子の座る机に近づいて、静かに言った。
その声は、今日も優しかった。
「もう、広まってるんだ」
京子は、できるだけ何でもない風に言った。
耕助も笑顔を浮かべた。
「まぁ、噂好きだからな、みんな。でも、それは部員が大事だからだよ。嬉しいんだ」
「わかってる。みんなのいいところだと思う」
そこで、一瞬の沈黙。空気が変わった。
「……でさ……このあいだの返事、考えてもらえた？」
京子は、自然と緊張した。
「……ごめん、ちょっと、今は考えられない……」
京子は、耕助の顔を見られなかった。
「そう。でも俺は、ずっと待ってるから。断られても、長野に新しく好きな人できるまで、あきらめるつもりはないから」
その口調は優しかったが、言葉ははっきりとした意志を表していた。
京子は、ただただ、耕助に申し訳ない気持ちで、いっぱいだった。
「京子、言っておきたいことがあるんだ」

耕助はおもむろに口を開いた。
台所で、皿洗いをしていた京子は、一旦手を止めて、振り向いた。
今、二人は耕助の自宅にいる。
高校を卒業してから、二人は付き合うことになり、現在は交際一年目を迎えようとしていた。
たまに、互いの家を行き来するようにもなった。
「何？」
京子は、濡れた手をふきんで拭いて、台所と居間の境に立った。
見ると、耕助の顔はやや緊張していて、京子も自然と表情を引き締めた。
「……今更こんなこと言うのは、卑怯だって、わかってる。でも、俺は知ってるから、言う」
「何を？」
京子は、不審げに声を低めて、問うた。
耕助は、一回息を置いて、言った。
「京子が知ってるかは知らないけど、あいつは根っからの女好きだ。たぶん、そのうちアイツは他に女を作る」
その口調は重かったが、耕助は京子と視線を合わせようとしなかった。
「何で、それを今更私に言うの。そして、なぜそんな風に言い切れるの」
京子の声は鋭さを帯びていく。
「アイツは知ってた。京子と今田が自分のことを好きなのを。アイツはそれを俺にも言っている。『今田は顔がきれいだから鑑賞用。京子は気が利くから、嫁さんにするならいいな。あぁ、どっちかにしなきゃならんとは、つくづく面倒だよな』ってな。結局あいつは、おとなしい性格の今田を選んだ。それも、おとなしければ、あまり面倒なことを言わないからって理由だ。あとは……俺が、牽制してもいた。アイツは、俺が京子を好きなことも知ってた。京子に何かしたら、俺に絶交されるとでも思っていたのかもしれない。だから、

それもあるだろう。アイツはなぜか、俺が離れることを恐れてた。まぁ、アイツに友達なんてもの、いなかったからかもな」
最後は、耕助には珍しく、皮肉げな口調になった。
京子は不快そうに眉をひそめた。
「答えてないわよ。何で、それを今更私に言うの」
声は一層冷えていた。
「……付き合うまでは、そんなことを言ったら嫌われると思った。健司の悪いところを言って、自分に気を向かせようとしてるんだと思われるのが嫌だった。だが、やはり俺は知ってしまった。だから、今、あえて、言った。今田の様子を、よく見といてやってくれ」
「……清美は、健司に振り回されていいって言うの」
「……俺が好きなのは、京子だから」
京子の言葉に、耕助は気まずそうに言った。
耕助のその言葉に、京子はつい頭に血がのぼってしまった。
「今更どうしろって言うの！　もうずっとあの二人は付き合ってるのよ！　何で、もうアイツは大丈夫だって、言ってやれないの！」
そこまで言って、京子は声を飲み込んだ。
そして、それを落ち着かせて、ため息を吐いた。
また、静かな口調で話を始める。
「耕助と健司は、仲がいいと思ってたんだけど、耕助が健司をそんな風に思っていたなんて、私の勘違いだったようね」
京子の言葉に、耕助は片手で顔を覆った。
「いや、アイツは俺の友人だ。友人だから、どんなダメなヤツでも放っておけないし、だからこそ、許せないんだ。でも、俺はアイツの悪い癖を直してやれることはできなかったし、これからも何もできそうな気がしない。俺は、そうするにはアイツに深く入り込みすぎた。アイツには、俺の言葉はもう空気みたいで、何も響いていかない。でも、俺はお前だけは守りたかった。そして、お前との関係も保ちたかった。できれば俺の望む方向に進ませていきたかった。

それだけでいっぱいいっぱいになってた。そうするためには、アイツと今田が付き合うのが、一番だと思った。実際、アイツも今田を気に入っていたのは事実だし。ただ俺は、少し背中を押しただけだ。そう、言い訳して、俺はずっとお前といた。そして、今こうして話してるのは、もしかしたら俺は許してもらえるんじゃないかと、また甘えているからなんだ。俺は、どうしようもないヤツなんだ。自分が幸せなら、あとはどうでもいいヤツなんだ……。……俺のことを、嫌いになった、か……？」

耕助は、恐る恐る京子の方を見た。

京子は鋭い表情のまま、耕助に近寄ってきた。

耕助は、あきらめたように、京子から視線をそらし、また顔を下に向けた。

京子は、耕助の座るソファの横に立った。

「……そうやって言うのも、全部甘ったれだって、言うのよ」

京子は上から言葉を降らした。

「そうだよ、な」

耕助は、自嘲気味に笑う。

「でも」

京子は、そう言うと、耕助の隣に腰を下ろした。

そうして、耕助の肩に腕を回して、横から優しく抱きしめた。

「もう私は、耕助のことが好きなんだから、それも、どうしようもないことなんだよ。今更、嫌いになれるわけないでしょ。……もう、全部……しょうがなかったのよ。そう、思うことにしましょう。でも、これから、みんなが幸せになっていけるように、考えていこうね」

教え諭すように、京子は静かな口調で言った。

「京子……」

耕助は体を起こし、嬉しそうな笑顔を見せた。

そして、その腕で京子を抱きしめ返す。だんだんと、きつく。

それから、十一年後。

「京子、おめでとう！」

「ありがとう」

妊娠の知らせを受けて、清美と健司が白河の家を訪れた。

あれから京子は、耕助の熱心さにうたれて、付き合うことになり、結婚に至った。

清美と健司も、同じように結婚をし、結婚式を、大きな桜の木があった場所で、一緒にしたぐらいだ。

「いいなー、私も早く子供欲しいなー。もう京子なんか二人目だものね」

清美は、京子のお腹をなでながら、笑顔で言った。

そう、結婚に至ったばかりか、未だに子供ができない野崎夫婦よりも先に9歳の娘がいて、そして二人目を授かっているのだ。

「本当びっくりしたもん、京子と白河君が付き合ってるって聞いた時は。全然そんな感じ見せてなかったし。まぁ、京子は誰にも同じように接するからだけど。それが、もう二人目なんて、お熱いことで」

清美はからかうように言った。

「そうなのよー。私と耕助は、互いに愛し愛されてるんだから」

京子もそれに返すように、冗談のような口調で言った。

「それで嬉しそうにニヤニヤしてる耕助が、何とも腹立たしいな」

隣にいた健司はやや呆れた笑みを浮かべて、耕助に言った。

「あぁ、俺は本当に幸せだからな」

耕助は、これ以上ないくらいの笑顔を浮かべていた。

「ねぇ、京子」

「何？」

清美は、笑顔で清美を見る京子の手を自分の手で包んだ。

京子は、清美の手から、何か自分の手の中に入る感触を感じた。
「手を開いてみて」
清美がそう言うので、京子はそっと手を開いた。
そこには、青い花があった。
よく見ると、陶器の鈍い光を放つブローチだった。
京子は驚いた表情のまま、視線を清美に向ける。
「出産祝いと、私達の友情の証に。私も同じものを」
「……ありがとう」
京子は、笑顔を濃くした。

「清美！　清美！！」
清美が手首を切ったという知らせを受けて、京子は慌てて駆けつけた。
ただ呆然としている理紗は、耕助が見ていた。
「清美！　清美！　何で……！　あぁ……っ！！」
あとはもう言葉にすることができなかった。
遺体確認のために京子は行ったのだが、ショックが強すぎた。
遺体を見た瞬間に、京子はその場に崩れた。
耕助は見ていられず、由実と瞭に理紗を任せると、京子の側に寄り添った。
京子は、耕助にしがみつき、その胸に顔をうずめて、大声で泣いた。

黒い服を着た京子は、墓の前に花を添えた。
今日は、清美の命日だ。
一緒にいた理紗や耕助、瞭も手を合わせた。

皆が顔をあげた時、ふいに京子が、理紗の近くにより、その胸に何かをつけた。
理紗が驚いて、京子の顔を見て、胸を見ると、そこには青い花をかたどったブローチがあった。

「これね、理紗のお母さんが、私が瞭を妊娠した時にくれたものなの。私と、理紗のお母さんの友情の証に」
「え……」
理紗は京子の顔を見た。
京子は、柔らかな笑顔で理紗を見ていた。

「でも、これは私よりも、あなたが持っていてほしいの。あなたは清美の思い出が私よりも少ないんだもの。娘なのに。だから、受け取ってほしいの。これは、今度は、私達とあなたが、家族だという証に。……いいかな？」
京子はそう言いながら、ブローチを撫で、次に理紗の頭に手をのせた。
理紗は、胸につけられたブローチを両手で包み、しばらく黙る。
「……はい」
そして、小さな、だが重い声で返事をした。
京子は、笑顔で理紗の頭を撫でた。
耕助は、少し複雑な、切なさの混じった笑顔で、二人を見ていた。

理紗の胸にある花は、アイリスだった。

こうして、思い出は積み重なり、続いていく。

＜参考＞

http://visit1.city.minamiboso.chiba.jp/emachi/hanajiten/(花事典)

RAN

＊＊＊2007/7/12＊＊＊

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8533v/

Blossom's Blue

2011年8月16日12時30分発行